

星 第二話 本当の人生

ユキアネサ

《あらずじ》

星の街の学徒カサインは星が人生の中心であり、無償の愛を知らず、常に緊張の中にいた。それゆえ自分が失敗して無能だと分かるのが怖くて、天文台を忌避していても行動出来なかった。《星讀祭》の失敗に耐え切れず、人生を諦めて漫然とぶらついた挙句、キャラバン隊に救われるが、濃霧に襲われカサインはまた危機に陥る。満身創痍のカサインは色づいた生を取り戻せるのか。

「とおいとおい昔の話です。また言葉がなかった時代です。そこには一つの《はじめの星》がありました。それはとても大きくて、世界がすっぽり入ってしまっただけでした。星の外には虚空がありました。」

その星には顔がありました。古い絵に出てくるお日様のような顔です。星は一人ぼっちでしたが、さみしくありませんでした。星はまだ自分のことを星と思わないで、ぜんぶ一つだと思っていました。星は言いました。

『僕は始まりであり、終わりであり、闇でもり、光である。そしてその全てでもない。僕はすべてのために。すべては僕のために』

星には大きな大きなしごとがありました。でも、ひとりするのが大変だったので、星は仲間をつくりました。つくり方はかんたん。頭の中で考えればすぐつくれるのです。

ただ、名前がぜったいに必要でした。星はまず自分の名前を考えました。その時、星は虚空に映る自分の姿を見て自分を《知り》ました。星はそのあたまでいっばい名前を考えて、たくさんの星をつくりました。

たくさんの星は、はじめの星と比べると小さく、自分たちが小さいのを《知って》悔しがって、もっと小さい仲間を欲しがりました。

『もっと小さい星をつくって。つくって』

〈小さな星々〉は暗黒の微小を浮かべて言いました。はじめの星はしかたなくもつと小さい星をつくりました。

〈生星〉ができました。生星と名付けた時に、はじめの星は彼らを〈知り〉ました。しばらく経つと生星も悔しがつて仲間を欲しがりました。

『もつともつと小さい星をつくつて。つくつて』

はじめの星はしかたなくもつともつと小さい星をつくりました。〈有星〉ができました。でも、有星も仲間を欲しがりました。こうしてはじめの星は仲間をどんどん増やしました。

有星の次は〈取星〉。その次は〈愛星〉。その次は〈受星〉。その次は〈触星〉。その次は〈処星〉。その次は〈名星〉と〈色星〉。その次は〈識星〉。その次は〈行星〉。行星も仲間を欲しがり、はじめの星にお願いしました。はじめの星は言いました。

『僕は世界を作る力を使い果たしてしまった。だから今度は君たちだけでつくつていいよ。でもつくるときは必ず僕に教えてね』

はじめの星みたいに一つの世界を作る力はなかったの
で、行星はそれぞれ生き物をつくりました。もちろんは
じめの星に相談して、はじめに生まれたので〈はじめの
生き物〉と呼びましょう。

はじめの生き物はその下に何も望みませんでした。は
じめの生き物ははじめの星がまだ見えていて、はじめの
星と会話ができたからです。

なぜなら、行星がはじめの生き物をつくる時に、はじ

めの星が自分の一部をこっそり分けたからです。

しかし行星はわがままで、欲張りでした。はじめの生
き物だけでは飽き足らず、また仲間をつくろうとしまし
た。とうとうはじめの星に黙って仲間をつくつてしま
いました。でも失敗して不完全な星ができました。それは
〈衛星〉と呼ばれました。夜空に見えるお月様も衛星で
す。

こうやって行星ははじめの星を悩ませるので〈惑星〉
と呼ばれて他の星からいやみを言われました。衛星は自
分が失敗だと分かっていたので自分のことを恥じて隠れ
るようになりまし。だから、太陽が昇ると、月は逃げ
るように隠れるのです。』

カサインは薄れゆく意識の中で父の声を聞いた。それ
はカサインがまだ幼い時に父がベットで読み聞かせてく
れた昔話だった。年に数回会うか会わないかの関係だっ
たのにどうしてこんなに憶えているのだろう。

「さて、とても長い時間が流れました。ある山にアンブ
ロシウスという子供がいました。彼は外の世界に憧れて、
生まれ故郷から旅立ちました。それはとてもとてもキラ
イな夜でした。彼はたくさんの星を見て幸せでした。

すると、小さな池を見つけました。池には夜空の星が
映っていてキラキラ輝いていました。でも、誰かの泣き
声が聞こえます。

『しくしく。しくしく』

そこには裸の子供がいました。子供は黒くて白い髪を

もち、全身は月のようにかがやいていました。子供は池
に映った星に手を伸ばしてすくつて集めようとして、池
にはたくさんの小さな波ができました。アンブロシウス
は聞きました。

『どうして君は泣いているんだい？』

裸の子供は答えます。

『僕は迷子になったの。おうちに帰れなくなったの』

『それはかわいそうだね！一緒に帰り道を探してあげ
よう。君はどこから来たの？』

『上から、夜空から来たの。それ以外はわかんない』

アンブロシウスは困つてしまいました。なんとかして
助けてあげようと星の名前をたくさん言いました。アン
ブロシウスは星にくわしかったのです。

『君の故郷はシリウスかい？』

最初に天狼星の名前を言いました。彼にとって天狼星
は特別だったのです。

『ううん』

『じゃあ、アルビレオ？アークトゥルス？それとも
フォーマルハウト？』

『ううん。僕故郷を忘れちゃったの。ほんとうは何かを
頼まれてここに来たんだけど、それも忘れちゃった』

アンブロシウスは悩みました。でも子供が泣いているのを見たくありませんでした。アンブロシウスは他人の気持ちにびんかんな子供だったので。なんとかして喜ばせたいと思いました。彼は魔法を使って池一面にヒメユリを咲かせました。アンブロシウスは魔法にくわしかったのです。ヒメユリの形は星に似ていました。そしていつぱいのヒメユリ畑を見て裸の子供は喜びました。

『やったー。おうちだ！ おうちだ！』

アンブロシウスは子供を見捨てられなかったので一緒に旅をすることにしました。ともに過ごすには名前が必要でした。

『うーん。君は月に似てるから（つきあかりのしようねん）はどうか。君だけの特別なあだ名だよ！』

裸の子供はただ『ありがとう』とだけ言いました。こうして二人は仲間になって、いろんなところを旅しました。めでたし、めでたし！

「アンブロシウスはいい子供だね。カサインも彼のようになれるかな？」

「僕なれるよ！」

「いい子だ。そんないい子にはこのブローチをあげよう。カサインもがんばって、たくさん勉強してアンブロシウスのようになるんだよ」

父が首にブローチをかけながら言う。

二

濃霧が恐れられているのは、その視界の悪さだけではない。濃霧に飲み込まれた者は、自我を失い茫然と漂うことが報告されている。彼らの顔が恍惚としているという事実はいつそう濃霧への恐怖を煽る。

彼らは二度と濃霧の外に出ようとせず、ただ漫然と時を過ごす。星も、競争もすべて忘れて幸せそうな顔を浮かべる。その姿はさながら亡者である。

カサインは頬にザラザラとした感触を感じて目が覚めた。上半身を起こし、頬に触れると付いていた砂が落ちた。彼は思い出したように後ろを振り返る。遠い後方に濃霧があった。カサインは生き延びたのだ。生還の余韻に浸った後、当然の疑問が浮かぶ。

——キャラバン隊のみんなはどうなったのだろう。ベアルは？ それに、僕はもう星の街に戻れないのだろうか？ 母は？ 母を置き去りにしてしまった。

カサインは今になって後悔した。平静のありがたみを痛感した。けれど、思いがけずこうも思った。

——何を今さら人並みに後悔してるんだ。お前はとっくに母を捨てたんだよ。天文台なんかに入らずに母と暮らすこともできたはずだ。だけどお前は占星家を選んだ。どうして天文台を見上げているだけで満足出来なかった

んだ。

「そんなの分からないよ。だいたい僕の家は占星家になることが決まってるんだ！ そんなのどうしようもないじゃないか！」

なんとか自分を弁護した。カサインは不機嫌になった。「僕は疲れている。疲弊しているからこんな声が聞こえるんだ」

彼は自分の置かれた状況に意識を集中し、これからどうするかを考えようとした。あたりは暗闇だった。ただ月だけが空にあり、砂漠は月光を受けて白藍色になっていた。この素晴らしい光景を目に焼き付けるように、彼は一歩ずつしっかりと足を踏み込み、前進した。

最も大きな問題は寒さだった。先刻まで気を失っていたせいで、夜の寒さは体の芯まで達していた。手先の感覚が鈍かった。彼は取り敢えず目先の砂丘を指して大股で歩いた。

砂丘を越えると突然、蛇に出くわした。蛇は二枚に別れた舌を素早く出し入れしていた。しなる筋肉質の体。冷たいが均衡のとれた綺麗な無数の鱗。彼は蛇に触れたくなかった。蛇と目が合う。その眼には知ってはいけない奥深い知恵が隠されているようで、それに吸い込まれて落ちていく感覚を抱いた。

だが、蛇はとっさに後ろを向いて素早く逃げていった。カサインはただ茫然と立っていた。突然のことで何も考えが浮かばなかった。

いくつ砂丘を越えたか分からないころ、遠くに光が見えた。それは街の光ではなく、小さな篝火がたくさん光っているらしかった。その日を囲んでいる人らしきものが見える。人だ！彼の身体も精神も限界だった。見知らぬ砂漠で、いつ助かるかも分からず一人で歩き続ける恐怖！人を見つけて安心感が増し、極度の緊張が緩和した。その気のゆるみから彼は安堵して倒れた。

三

ふと意識が戻る。ぼんやりとしているが、次第に頭が何かを考えるようになる。瞼の裏が見える。温かい日光を浴びた橙色の瞼が。日光が苛立たしいので、反対側を向いてうつ伏せになり、両目を片腕で覆う。かなり強く押したので、眼球がジンジンと痛んだ。瞼のスクリーンにはたくさんの幾何学模様が出現し、その姿を捉えざる前に違う形に変化していった。傍からは会話が聞こえていた。

「やっぱりこの村に置いておいてよかったのかな」

「もうよせよ、その問題は族長たちが話し合っ解決したじゃないか。それに危険なものを持ってなきそうだし。何も起こりはしないよ」

「でもやっぱり怖いよ。だって外の人が来るのはあの人を除いたら初めてなんだよ」

カサインは完全に目を醒まし飛び起きた。目の前には一組の男女がいた。見たところカサインと同じぐらいの

年頃で若々しく、生命力があった。

「きゃっ！ご、ごめんなさい。私たちらのはなし声で目が覚めてしまったのね」

女は笑顔をとり繕ろうと、すぐ横を向いて隣にいる男に小声で話し掛けた。

「ねえ、どうしよう！」

「俺に聞かれても分かんねえよ！とりあえず自己紹介でもするか」

男は咳払いをして、姿勢を正した。

「俺はネレド。こっちはシオンっていうんだ。よろしくな。あ！族長たちに伝えるに行くから、あと頼んだ！」

ネレドは急に思い出したようにそう言い、一人だけで急いで天幕から出ていった。シオンは慌てて彼の服を掴もうと手を伸ばすが、間に合わなかった。

「ちよ、待つてよ！私を一人で置いてかないでよ」

そして去りゆくネレドの背中を睨んだが、カサインに横目で見られていると気づくと急いで姿勢を正した。彼女は決まりが悪そうだった。

「あはは……そ、そう！君砂漠で倒れてこの村に運ばれてきたの。で、このテントに寝かせて様子を見てたんだ。私とネレドは世話を任せられたの」

女は一息で言い切った。

「君はどこから来たの？名前は何て言うの？あ、その胸のヒメユリ綺麗だね。私もそんな風に付けてみたいなあ」

女はなんとか話題を見つけようとした。一旦話題が見つかれば、あとは流れのままに会話が弾むだろうと思っっているようだった。ネレドに頼れない代わりに、話題にすぐろうとしていた。カサインは会話の速い流れについて行けず黙っていた。

沈黙。

すると物音がしたので天幕の入り口に目をやると子供と目が合った。

「こっち見た！逃げろ〜！」

「逃げろ〜！」

何人もいるらしかった。子供たちは楽しそうに声を上げながら走っていった。女は子供に気付くとまたかという感じで声を張り上げた。

「こら！ここに来ちゃダメだって何回言えば分かるの。旅人さんは疲れてるんだから放ってあげなさい！」

女が立ち上がって後を追おうとした時、こっちを見ながら逃げ回っていた一人の子供が歩いてくる若者の膝にぶつかった。

それはネレドだった。

「悪ガキども！また来たのか！今度見つけたら『森』に置いてくぞ！」

子供たちはさっきとは違い悲鳴のような声を上げて逃げていった。どうやら『森』とやらが心底怖いようだ。

「騒がしくてすまない。あいつら可愛いんだが、元気が良すぎるのも問題だよな」

ネレドが笑いながら言う。

「あなたが起きたことを族長たちに伝えたら、連れてこいつて言われてな。手間かけてすまないが、一緒に来てくれないか」

カサインは二人と共に族長のいる家へ向かった。

四

族長たちはカサインとしばらく話した後、彼がこの村に滞在するのを許可した。

カサインはネレドの家に住むことになった。けれど家というほど豪華なものではない。この村にはせいぜい樹と葦で作った小さな建物があるだけだ。これらの材料は森から調達しているらしい。この村は真ん中にある森を囲うように成立している。

森はその日を生きる糧を与える恵みの地である一方、危険な動物が多く住まう殺戮の地でもある。だから、森には決して一人では行かず、長居して必要以上にものを取らない。

だが、ただ一人森に住まう聖者がいるらしい。みな彼のことをナーガアートマ〈偉大なる魂〉と呼んでいた。

カサインはこの村を〈さすらいの地〉と名付けた。彼らと共に生活するうちにいくつかのことが分かった。

まず、この村は彼らだけで今まで生活しており、キャラバン隊との交流もないらしい。今までというのは、つまり数千年間、おそらく〈星の大災害〉以降ずっとこの

生活を送ってきたのだ。

そして彼らは恐ろしいほど長寿だ。最初に会ったネレドとシオンは千歳を超えていて、ずっとあの見た目のままだそう。もちろん生まれた時は幼い容貌をしているが、一定の年齢を超えると容貌は変化しなくなるという。彼らはそれを〈アトル期〉と呼んでいた。それはカサインの感覚でいうなら二十代の容姿である。

そして彼らは森に住まう蛇を崇めていた。ある時は、恵みをもたらす水の象徴として。ある時は長寿や子孫を授ける生命の象徴として。彼らは自分たちの祖先は蛇だと言つて、至る所に蛇を模した木の塔を立てていた。

カサインには彼らがとても無知で無垢に見えた。純粹そのものだった。彼らに世界の外はなく、争う必要はなく、ただその日に必要な食料や材料を必要な分だけ森からもつて来る。その繰り返しを数千年も繰り返しているらしい。未だに、あの自然が差し出す分だけ受け取るという原始の生活を送っていた。

カサインはとてもそんな生き方は耐えられないと思つた。カサインは未だに心の奥では星の街と結びついていて、星の街以外をどうしても認める気にはなれなかったから。それに体内で轟々と燃える炎はどうすればいい？

カサインにとつて嬉しかったのは、植物が多くあったことだ。ここの花は天文台のそれと比べて生き生きしていた。この場所のせいだろうか。技術だけを比べたら、星の街のほうが遥かに進歩している。

けれども発展を極めた遺宝解析の中心と言われる星の街では忘れられた、何か生物的な、肉体的な発露のようなものがここにはあった。それはこの土地から湧き上がる

つていた。それを受け取つて花々は成長していた。

この土地から噴出するものはカサインのブローチにとつて毒だったが、ブローチより深いところはずっと前から求めているものだった。そして彼らは感情的で開放的だった。族長を除けば明確な身分差はなかったのが気兼ねなく話していた。しかも族長との関係も職業上の区別であり、個人の生まれながらの区別はなかった。

そして彼らは肌を出していることが多かった。子供たちは性別に関わらずみな裸であるし、アトル期に入ったものでも葦か何かで作った腰巻を付けていただけだった。カサインは人の裸を見るとひどく気分が悪くなった。特に女性の乳房。日に焼けて、熟れた果物のような乳房が上下するのを視界に入れるのさえ嫌がった。いつまでも服を着ているカサインは村人から不思議がられたが、どうしても脱ぐ気にはなれなかった。裸になるのは星の街の住人らしからぬ行為だと思つたからだ。

それは雲一つない快晴の午後だった。「働かざる者食うべからず」と笑顔でネレドに言われたカサインは、午前中に魚を釣つて捌き、村人に配ることを日課にしていた。ネレドは魚釣りに同行し、午後になるとまた違う用事で出かける。カサインは小屋の入り口に腰掛け一人で物思いにふけていた。日光は温かく、庭にあるカラミンサ・ネペタの花弁が眩しかった。そよ風が吹くと花は揺れて虚空をやさしく撫でていた。

そんな静寂を破る予期せぬ客が一人やつてきた。それ

はカサインが助けられたばかりの時、うるさく走り回っていた子供の一人だった。

「お兄ちゃん星に詳しいの？」

どうやら族長と話した時の情報が広まっているらしい。カサインは「そっだよ」と答えた。子供と話するのは苦手だ。彼らの計算ずくでない自然な発話の勢いに圧倒されて返事に時間がかかってしまう。

「じゃあさ、今夜一緒に星を見にいこうよ！ 僕アーヤっていうの！ よろしくね」

「ああ、よろしく」

星なんて散々見てきたが、子供の頼みを断るほど飽きてはいなかった。カサイン達は夕食後星を見る約束をした。

夕食はいくつかの小屋で一緒に食べるようだった。構成員は特に決まっていらないが、昔からの習慣だったり仲の良い近所だったり一緒に食べるらしい。ネレドの隣の小屋にはシオンが住んでいた。シオンの小屋の庭にはブーゲンビリアが植えられていた。シオンとネレドを含め何人かで夕食を囲った。その間シオンが話しかけてきた。

「この前、族長に言ってたテンモンダイって何をするとこるなの？」

「星を調べる所だよ」

「星？ あはは！ なんて星なんか調べるのよ。空に浮かんでるだけじゃない」

カサインの影は増長した。

カサインはこの村に来てから小さな違和感があった。それはこの村の言葉についてだ。彼らの使う言葉はなぜかカサインに通じた。そして、ある領域では豊饒な語彙があるのに、別の領域ではあまりにも乏しかった。まるで彼らの生活に関わらないものは全て切り捨てられているうだった。

例えば、蛇に関しては無数の別名や個体名があるのに、星辰に関する表現は貧弱だった。星の固有名詞は存在せずまとめて星としか呼ばない。そもそもなんで何千年間も外との接触を絶っている村で言葉が通じるのだろうか。この世界に言語は一つしかないのだろうか。カサインが考えているうちにもシオンは話し続けていた。

「でも夜空の研究をするところって綺麗そうだよね」

「そんな良いところじゃないよ」

カサインはそれしか言えなかった。

五

夜空の鑑賞会は村のはずれの小さい丘で行われるらしい。アアヤは他にも沢山の子供を誘ったのでカサインはげんがりした。気分を子供と同じように明るくする

のが思った以上に大変だった。陵丘へ行く途中アアヤと話していた。

「お兄ちゃんはもともと星を調べてたの？」

「そっだよ」

「それは楽しかった？」

「楽しかったよ……」

アアヤは怪訝そうにこちらを見ていた。

「嘘だ！」

「え??」

「本当に楽しかったら楽しそうに話すもん。今のお兄ちゃんぜんぜん楽しそうじゃない！ だから本当は星なんか調べてなくて別のことをしてたんだよ。でも言いたくないから隠してるんだ。ずるい！」

アアヤは機嫌悪そうに大股で先を歩いていった。カサインの周りの影は濃くなった。一瞬反発しそうになったが、何か心の奥をえぐられた気がしてハッとした。

——そうなのかな？ あそこにいた時は、他の学徒を何の値打ちもないもののために身を削り合っていると見下していたが、俺もそうだったのか？ 小さい頃からあそこに入るために頑張って頑張って欲しい物も我慢して、ただひたすら星の知識を吸収した。あそこに入ると全てが上手くいき人生が変わると思った。今まで犠牲にした分だけ恵まれると思った。でも結局何も変わらなかった、むしろ酷くなった。あそこは終わりではなく始まりだった。優劣争いはますます激しくなり、求められる基準は上がる一方だった。そっだよ。何もいいことなんてなかった。

たんだ！ 俺も天文台なんかのために身を削ってしまった。天文台なんて……俺の生を預けるだけの価値はなかった。そうか、俺は生きた屍なんだ。心臓は鼓動し、血は体を巡る。だけど！ 心は死んでいる！ 血は赤くなく無色だ！ もう嫌だ、こんな生き方は嫌だ！ 俺は生きたい。本当に生きたい！

そう思うと胸のヒメユリが忌々しく思えてきた。外したいと思つたが、本当に外していいのか分からず悶々とした。外したらもう後戻りはできない。今までの努力はどうなる？ 決心は出来なかった。八つの星と十二の星座が彼の心を握っていた。

丘に着いた時も彼は悩んだままだった。丘は一面草原が広がるばかりで視界を遮るものはなかった。夜空には無数の星が光っていた。星の街では、空に向かって伸びる挑戦的な無数の黒い舌の塔が視界を邪魔したが、それもなく直に夜空を見た。

虚空を背にして、よく磨かれた鏡には青紫の染料が塗られ、大きい光も小さい光も遠慮せずに輝いていた。今にも降つてきそうな無数の星々。その一閃は命の輝き。その質量は命の重さ。

星の名前はもろろん、星という言葉さえ、美しいという言葉さえ出てこなかった。その前にカサインは心を奪われて動けなかった。彼は生まれて初めて星を見た。今まで見なかった分まで味わうようにじつくりと見た。実際そうだった。今までは星を見ても、星を通して違うものを見ていた。

そして星だけでなく、他の沢山のものも本当に見ては

いなかった。そう思うと、あの星の輝きが今まで見失っていたものの輝きに感じた。その時だけは胸のヒメユリを忘れられた。

——そうか。あの輝きは俺の人生の輝き。本来送るはずだった本当の人生の輝き。あの数量は俺が本来選べたはずの人生の選択肢。

それに気づいた時、彼は急に悲しくなった。今までの自分をもの悲しく思った。彼は目覚め始めていた。

「お兄ちゃん！ 綺麗だね！ 星はなんで光るの？」

「……」

「お兄ちゃん??」

「くっくくくっくくっくくくく」

「うわ！ なんでお兄ちゃん泣いてるの？」

彼は訳が分からずに泣いた。噛みしめた歯の間から、嗚咽が迸り出て止まらなかった。今まで生きた分の、失った生の分だけ涙した。人前で、しかも子供の前で泣くのは恥と思っていたがそんなことはどうでも良かった。無償の愛の大地、抱擁のガイアが見守っていた。

「もう、これじゃあ星の話聞けないじゃん！ つまんないの。せつかく楽しみにしてたのにさあ」

横でアーヤが話しかけていたが、彼は泣き続けた。

長く続いた鑑賞の間、夜空をみて子供たちは喚声を上げていたが、その中に一つ慟哭が混ざっていた。端にいたその男は子供など気にせず大人げなく喚いていた。夜

空は彼らを包むように見下ろし、星はこの切ない夜を物語った。